

冬の満ち欠け

製作家・演出家・俳優
藤井颯太郎

1995年生まれ。兵庫県立宝塚北高校。演劇科在学中、幻灯劇場を旗揚げ。18歳の時に書いた戯曲『ミルエ・メコリオでせんだい短編戯曲賞を最年少受賞。近年は、架空のホテルに宿泊しながら観劇する『泊まれる演劇』シリーズの演出を手掛けた。NHK連続テレビ小説『おちよやん』に出演したり、ABCテレビ『THE GREAT 87』でAメー・グループにプロデュースを発表するなど、多方面で頑張っている。

桜木裕子はホームの中でも一際目を引く存在だ。同年代の女性ではあまりみないほど長身で、いつもやや脱力しているからか、その仕草には余裕と品がある。彼女がこの老人ホームへ入所したのは一年前のことで、当時からすでに彼女はかなり重度の認知症だった。彼女を初めて見た日、彼女はあの細い身体はどこから出てきたのか不思議なほど太く強い声で「帰れ！帰れ！」と絶叫していた。ここへやってきたのは彼女自身だと言うのに。ホームに馴染むまでしばらくは、夜中に逃げ出そうとしたり、他の利用者の車椅子を取り上げたり、食事をひっくり返し投げたり、投げられたり、とにかくひどい暴れっぷりだった。

はじめのうちは頻繁に顔を出した息子夫妻の足が徐々に遠のき始めた頃、桜木裕子は突然大人しくなり始め、今度は誰とも話さず食堂の一番隅の椅子に座りじっと窓の外を眺めるようになった。ヘタに話しかけ以前のような大騒動になるのを恐れたのか、そんな彼女に話しかける人もあまりいなかった。

僕が夜勤を担当した日だった。うちのホームは二十二時になると消灯することになっていて、それ以降の時間、利用者さんたちが徘徊していないか、定期的に見回るのが夜勤の主な仕事だった。全館をまわり消灯の確認を終え、管理人室へ戻る途中、食堂隅の席に誰かが座っているのを見つけた。桜木裕子だった。真っ暗な食堂の隅から月を見上げていた。

「昔、夫が話してくれたことがあるんです」これまで聞いたことのないほど澁みなく、はっきりとした口調で、裕子さんが話し出した。「月と地球は引つ張りあっていて、地球上の水っぱいもの、海水とか、私たちの血とかは全部満月に引つ張られるんですってね」最近の裕子さんは、身の回りのモノの名前でさえうまく出て来ない様子だったのだ。その夜の裕子さんは明らかにいつもと様子が違った。「最近よく引つ張られるな」と思っ、月を見てたんです。そしたら伊部さん。頭の中のモヤが晴れて、忘れてた言葉とか人とかを突然思い出したんです。ずっとグラついてた永久菌が一思いに抜けたみたいな気持ち良さでした。わかります？」裕子さんはやっとな僕の方へ向いた。シワを刻んだ瞳の奥で静かに興奮しているのが伝わってきた。「すみません、僕はまだ乳歯しか抜けたことがなくて……」そう。まだお若いものね」そういうと、裕子さんは自分の部屋へ戻っていった。

意外なことに裕子さんは、これまで同様の生活を続けた。他の職員にはもちろん、息子夫妻が会いにきても、自分の頭の中で起きた大きな変化について伝えようとはしなかった。ただあの夜以来、僕が夜勤の日ばかりはきまってる消灯後の食堂の隅で裕子さんが待っていた。その度、僕たちは暗い食堂の隅でお喋りをした。息子夫妻は裕子さんがスグに忘れるだろうことをいいことに、夫婦それぞれの愚痴や秘密を打ち明けてくれたりするらしく、それが最近の密かな楽しみらしい。

「でも、もってあと数日だと思うの」昼間のレクリエーションで自分が折った折り紙を丁寧に折りなおしながら裕子さんは独り言のように呟いた。「数日ですか」満月に引つ張られて頭のモヤが晴れたわけでしょ？ だから月が欠ける頃にはまたボケ直しちゃうと思うの」手元の折り紙は何重にも折り目を増やしながら、あつという間にツルの形に変貌していく。記憶がハッキリしている今のうちに、会っておきたい人はいないだろうか？ 思っていたことがそのまま僕の顔に出ているのか、裕子さんは「わがまま、聞いてもらってもいい？」と口角をあげた。

クリスマスセール真っ盛りの街を早足で駆け抜けていく。十二月の容赦ない外気は、僕のコートを羽織っただけの裕子さんと、厚手のスウェットとマフラーだけで耐える僕の足をどんどん早ませた。「ビザですか？」そう「最後にそのお店に行つたのは何年前ですか」行つたことはいないの。私、昔バレーナだったでしょ。引退するまで我慢し続けてたの。我慢し続けてたのを、さっき思い出したのよ」裕子さんの過去の話を聞くのはそれが初めてだったが、彼女の身のこなしや軽やかな足取りを見て、妙に納得させられた。彼女が行きたがったイタリヤンの店はどれだけ調べても出てこない。彼女の記憶を頼りに街中を徘徊する。二十分ほど歩き回り、彼女の足が止まった。そこに店はあったし、営業もしていたが、それはチェーン店のハンバーガーショップになっていた。裕子さんは両隣の建物を何度か確認した後、中へ入って行き、澁みなく注文と会計を済ませると、奥の窓際の席へ座った。ビザじゃないけど良いのかと訊くと、チーズバーガーも似たようなものだとして、裕子さんは笑った。

到着したバーガーを齧りながら昔話を一通り話し終えると、裕子さんは窓の外を見ながら静かになった。「記憶って相対的なものでしょ？」ナプキンで折り紙をしている僕に、裕子さんが突然話しかけてきた。「私があなたを忘れてしまったとして、あなたも私を忘れてしまったとして、それで誰が困るの？ 覚えてる人があるから、忘れることがハンデになるのよ」裕子さんは僕の折りかけのツルを取り上げ、少し手前から折り直し始めた。「また忘れてしまうことは怖くないですか」と訊くと、伊部くんにしかなえないけれど、と折り目を爪でベタンコにした。「うちの息子が来る日はね、私は毎日テストを受けてる気分だった。覚えてる人は正解を知っていて、私だけが懸命にそれを当てなきゃいけない。でもあの子たちが会いに来なくてから私はそのテストから解放されたの。あのホームでは、私は誰にも試されていないと感じられる。だから、月が欠けてしまつても実は平気なの」と言った。「僕はちよつと寂しいですよ」あなただつて永久菌が抜ける頃には、私のことは全部忘れてるわ。お互い様よ」そういうと、裕子さんはナプキンで出来た折鶴の翼で口の端についたケチャップを拭いた。

裕子さんの脱走を手伝った僕は一週間の謹慎処分を食らった。僕がホームへ戻った頃にはもう、あのお喋りな裕子さんはいなくなっていた。おまけに以前は使つていなかった車椅子に乘せられて、大人しくなっていた。あの日、あれだけ走つたのが響いたのだろうか。裕子さんはまた、食堂の窓際の席で折り紙を折っていた。「なにを折ってるんですか？」と訊くと、何度か思い出しながら折り返したのだろうか、手の中にあつたシワシワの折り紙を見せてくれた。彼女の震える手に代わり、今度は僕が折ってみる。何度も試行錯誤を繰り返し重ねられたその折り目は、裕子さんの手の皺に似ていて美しかった。折り目をなぞって折り続けると、少しいびつで、柔らかな輪郭の鳥が現れた。

